



昔語質屋  
庫卷之三

初篇



昔語質屋庫卷之三

東都

曲亭馬琴演

依藤太が龍宮入の弓袋の下



弓袋ハコトとて聞くとつゆのまゝ小精はして。まづまづやう小一碗乃  
 茶を喫し襟かたのけて組む海と。小膝よ扇を衝くまじ。童の弄物。婦人  
 衣裳ハハカとも小燈燭の下小居よらんとして。席のすむ衣まじりたり。  
 當下弓袋聲をうきまて。彼秀御ぬが湖水ある龍王の為小村て殺せ  
 といふ巨蜈蚣のつゝ取て。世俗附會の況をひ。件の蜈蚣ハ近江の三上山を。  
 七圍半まじり。三上山ハ石都と草津の間。六地を。喝々村果たり。二十町  
 むろろ小あり。この山の巔の凹る。如く池あり。又藤小巖穴あり。崑門ハ僅小  
 二尺たうり。内と究めて廣く。一名を蜈蚣山といふ。まよ蜈蚣まじり

質屋庫卷之三



雲英末雄 54-00008



不経のつちららるるわのさうなるべしといふ。五雜又一説あり。奔地  
 記といふ所のよ。平昌城といふと云ふは井のり。その水荊水と通へ。神龍  
 有てこまう出づ。故に龍城と名つくといふ。階確りその書は我言如く。  
 堀抜の井戸をくら。龍城と名つけんは湖水の中といふとも。龍宮の  
 とへ経がさけまど。件の博士が評せしむく。龍のうづ人と異なる。果して  
 人とおがらからどへ。その居も亦必人間ある所の宮殿樓臺ありあり  
 べららば。ある小秀郷朝臣の到りといふ龍宮城へ。瑠璃をりて沙じ。金玉  
 とりて秘巻じ。朱門高樓。帝王の宮闕小勝うるといふ人間と異なる。凡  
 おりよ湖水の神龍が。形状と変じて小男とたり。秀郷ゆゑ派遣せし。と  
 いふるれば彼宮殿も。真の宮殿ありあはじ。又浪と云はれて水中をりて五十餘  
 町と云ひも。實に水中ありあはる人か。水中に没てえりたこといふ必死を

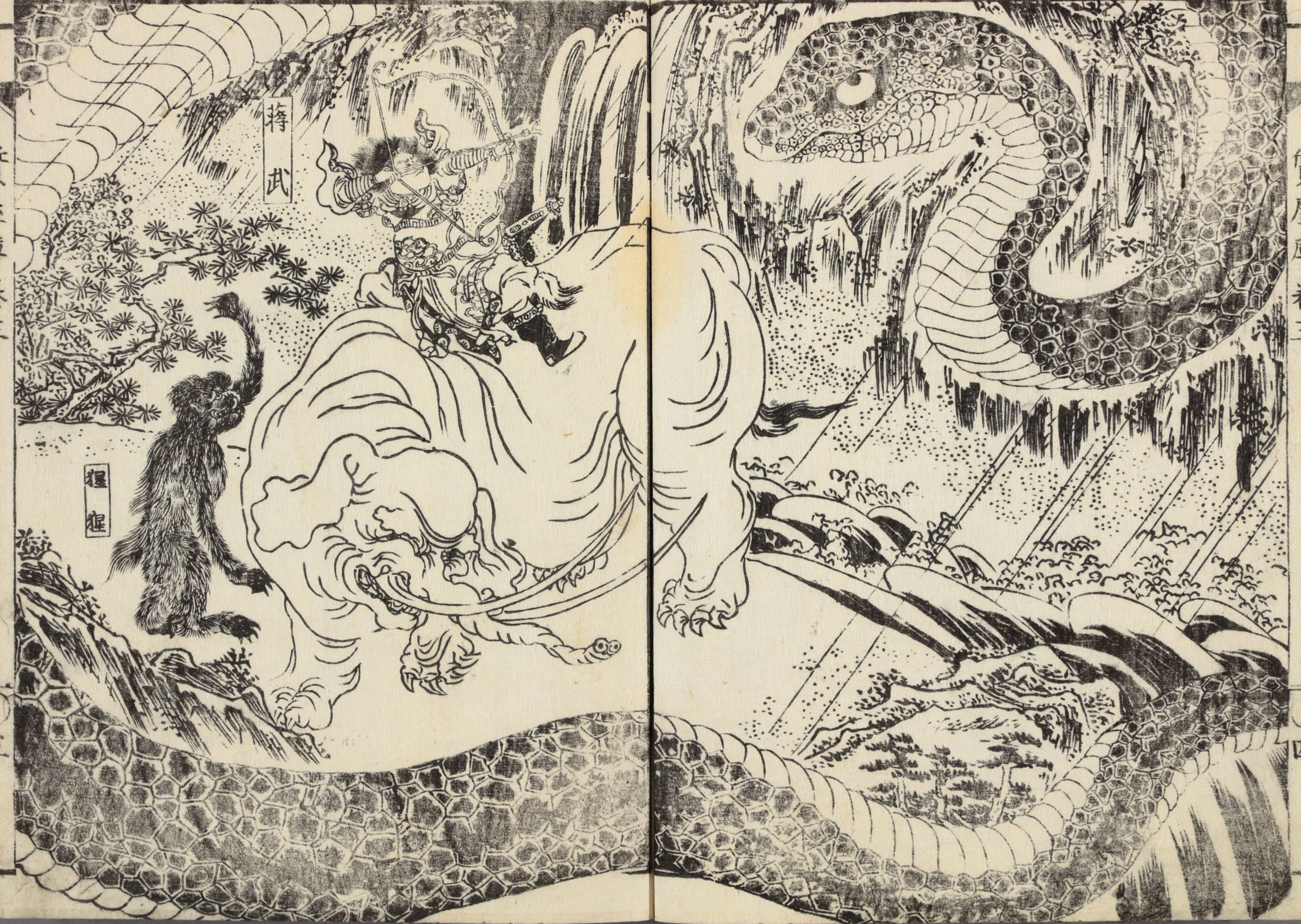
といふ所のよ。龍王の神通ふらうて。浪と披きそ湖水と陸のてくはる  
 とのりとも。数日早乾とふあはる。泥土深くて渡りかたうべ。あられど  
 樓閣も水中も。さる假物ゆく。狐狸の人を魅よ。異なるよとす。されは  
 秀郷朝臣ハ武勇もる。只研客癡漢るんどの。狐狸よなるこれいづく。  
 世は虚気する人といふ。秋秀郷朝臣ハさ奴のらる。龍王の仇と云。  
 蜈蚣と教と威風あり。龍王神通自在ありとも。いづくこまを魅し。ゆん  
 彼龍王ゆへに区ひど。湖水の浪と云はる。五十餘町ゆへに。機といふ所のよ  
 へ振く渡りうかど。夫海底よ。龍宮のありといふべし。智の人の信と  
 せむ。況て湖中小宮殿樓閣あり。世俗ハ只耳を信じて目といふ。いふは  
 後の仰り物語あり。いづかのの取べきありても。アノ下よ。年めて。意は恐ど。  
 そのよは恐るる。原仙物語のよ。初よりあれど。ある小むじの小説ハ。是非を

論せむと実言とと古今の人情異なるよは「悉書と信せむ書るれあ  
 ると」といひん。実よ古人の金言あるや。彼蜃氣樓るどりのこと。海  
 辺の人のとく。こまをさるのりといひるれ。こ蜃といひの。形蜻龍よ  
 似るが。氣を吐とありとるん。その氣空中へ立のりて宮殿樓門画くこく。  
 あらつととぞいひるの。唐山ありの蜃樓とも又海市とも名つけら。亦一説小  
 蜃はその形蛇の如くやと大蛇。腰以下鱗はも。逆ぞうともい説あれば。  
 亦その状蜻龍小似く。角あり耳あり。鬣ありて。紅きといひ説もあり。又  
 雉と蛇と文まぶ。蜃と生とも吐え。或ハ蜃ハ龍也。比及井よあり  
 ハ氣を吐て雨とあり。海ありとれハ氣を吐く。宮殿とるよといハ世俗乃  
 所謂龍宮城ハ蜃氣樓と訛傳てあぬる。えいよ中あらん。又一説ハ蜃  
 ハ是大蛤也。故ハ海中の車螯と蜃といふとありて。蜃とすたまじり

車螯ハ  
 うしのこい  
 時珍云  
 梵書謂  
 之牟婆  
 各担担  
 蟬ハ  
 若水本草  
 曰トフカヒ  
 蜃氣樓  
 國者蜃  
 盤の下よ  
 大蛤を  
 あぐくま  
 蟬あり

と訓りのあはど。こ古人の誤あり。り蜃とめて蚌蛤の属とせば。いづく  
 うく變化して人と害する小至と。蜃といふハ二種あり。海市蜃氣樓と  
 けいりのハ蜻龍の属あり。亦雉ハ大水小入りて。蜃とるとい。雉ハ本  
 蛇の化るとい。然るれば。その類はまじり。あはどと蛤とていひ。信  
 蜃氣といひのハ海氣也。大凡海水の精多く結て形をば散りて光を  
 るとてあるもの。蜃の丸ありあはどとい。一説ハ徒よとれハ夏雲のこまぶ  
 る。奇峯小似る小等。亦是あつく怪む足らば。件の説と推とれハ蜃  
 氣樓より物のなるよ。水中小の宮殿ハ何りのこととを伝らん。  
 古人の寓言疑ひる。よ。彼秀郷朝臣が龍小清と。巨蜃蛤を射ば  
 とり物語も。本つて承つたあもあは唐山の小説ハ唐の教宗の宝曆年間  
 蔣武といひの射獵とめて業と。されば。矢と挾。熊羆虎

蔣武  
白象  
の爲  
巴蛇  
を射  
るを  
ころ



蔣武

猩猩

簞屋庫卷三

四







小貞盛ぬを異て將門を討滅し。弓矢をりてその家と與へれば。大力澄へその武を表し。巻須米俵へ夜食を子孫不傳と表し。撞撞ハ武名四海又鳴るよと表し。あつとバ原寓言といふども。他意ありあつと。世俗の常流ハ批る不足なねど。正史といふも。小説と収るあり。げに人の由只未とのを尋てその本を究めば。神代卷不倣てや一書おも亦秀御朝臣の龍宮入りうを注し。こまの後人の追書するならん。さればるれと書つひは。可惜弓袋おれ衣とが彼とて秀御ぬも冥土と。こぞを憂くお不こめ。と云ひあつと。長物語も。そまを小ゆあり。誰おもめ。代と。いひうけて引退けど。衆皆やと散動めたり。

第六 石堂丸高野詣の脚絆

弓袋が高論ふ。まづ感嘆とて鳴ゆ。己ど從書以引き。訛と辨じて。身のぬき衣をひきくとも。こま右へハ。と衆皆面とあつと。講坐へ推處るののろしう。見臺先生左右とえう。いひびる徒を。夜まをやと深さる。うどて控諫とあり。十三番目の古衣棚。蹴揚の泥の乾干する。世の人口小膾炙する。加藤左門尉重氏入道の嫡男石堂丸の脚絆る。まづ。まそも重氏入道の筑紫小名なる武士。り。が妻と側室が。さ。對ひ。假寝する。と。兩嶺ま。兩個の婦が黒髪の小蛇と。りて。喰あ。驚嘆し。外面如菩薩内。如夜叉と。忽地悟る。不二法門。これ善哉のた。はて。所領の地を棄。妻子を捐。恩愛恋慕の絆と。ま。又。髻弗と。勇。へ。高野山へ。け。登り。刈。蓋道。と。法。汚して。塵を。海。迹と。埋め。只。願。仏。は。事。成。牙。の。勢。と。志。の。ハ。妻。子。の。愁。嘆。大。う。こ。ら。ら。む。と。腹。

ところが家隸の時とびが不奸計。蕙蘭繁らんと何れとれども凡  
 の為は破す。泊船静らんとすまじども浪の為は洗きてその子と  
 家と嗣よりあつ。その妻の室を守りがら。遂に他人は横領せる。事の  
 為体と論ぶまば重氏一城の主とく。妬婦の妖怪とて驚き怖ま  
 妻子珍宝及王位臨命終時不隨者と大集経の一句と耳に。妻子  
 と棄城地と捐俄頃小出家入道と。高野山へ隱まらる。仏説よりれ  
 と死つと有る。死道心るまども。先祖の為は。甚だ不孝といふべし。  
 凡禄の妻女ふらむ。その子は嗣。その孫は徳。五椿の八千代中。所領  
 の地を失され。官位俸禄の親も倍せと。ありのつての人情ある。小土  
 家する時。あつと。怪しとて。怪しむ。狼狽て頭髪と剪。妻と  
 子。子に女。その成長りども。俟て二人のまの馬が狂ひ。土。その尾

小附く。親族妻子。老黨。入。意の馬が狂ひ。出。家難。大。つ。つ。  
 あれども幸ふく。内室へ標正く。石堂孝。深。く。高野と。む。り  
 づく。葉。小。父の。往方と。あらん。と。一個の。徒者。扶引。と。幸。彼。山  
 へ。小。内室へ。積。お。ひと。長途の。瘦。病。卧。て。終。む。は。く  
 たり。の。石堂。九。八。葉の。峯。小。け。今。道。と。て  
 索。と。判。今。道。一。昨。判。今。道。小。君。の。ひ。て。と。  
 志。孝。子の。誠。と。大師の。憐。ひ。ん。端。く。又。環。會。と。  
 年。末の。不。つ。遂。悪。人。と。討。た。家。と。奥。で。る。が。哀。れ。の  
 物。結。五。鏡。経。の上。よ。三尺の。量。と。口。吟。と。い。の。の。ひ。  
 あれども。あ。た。る。書。と。受。つ。あ。た。る。と。川。萱  
 親子。地。と。既。古。蹟。と。遺。と。れ。世。と。も。經。と。その

虚実丁を志すはゆけし。出させり人と手とあつて。よりあり。席よおし  
 居る。石堂丸の古脚絆へ。迷惑さう。改を搔き。うらなをせ。石堂が脚  
 絆脚絆と喚ぶ。とど。全りつ。川。萱法師の。一子あり。ゆへ。原へ筑紫の  
 の白水郎が。思ふ。石之助といふ。り。る。九歳の。と。死。親。捨。叔。又  
 の由縁。よ。と。大和の五條へ。出奉。公。十年の。年。季。と。半。勤。し。十三。といふ  
 春の。季。瀬。崎の。金。毘。羅。お。が。ま。んと。て。密。よ。主。の。家。を。脱。出。し。れ。ど。な。や  
 紀。路。ふ。と。路。費。と。失。ひ。象。頭。山。へ。ゆ。も。多。く。ば。愚。癡。う。ら。高。野。へ。糸。緒  
 志す。い。づ。つ。よ。ゆ。り。し。く。備。輦。ふ。あ。ご。も。笑。つ。と。或。ハ。高。野。山。と。俾。名。ら。  
 又。石。之。助。と。よ。呼。ぶ。く。石。堂。と。と。呼。ぶ。符。は。奴。方。る。人。の。い。と。苦。く  
 志。死。お。ら。し。て。某。が。穿。ら。る。脚。絆。へ。石。堂。丸。が。言。世。請。と。書。志。し。し。る  
 紙。牌。と。つ。け。人。と。り。る。と。も。夏。旅。の。憂。う。し。と。と。忘。る。と。叮。嚙。よ。教。訓

志す。い。づ。つ。よ。ゆ。り。し。く。備。輦。ふ。あ。ご。も。笑。つ。と。或。ハ。高。野。山。と。俾。名。ら。  
 又。石。之。助。と。よ。呼。ぶ。く。石。堂。と。と。呼。ぶ。符。は。奴。方。る。人。の。い。と。苦。く  
 志。死。お。ら。し。て。某。が。穿。ら。る。脚。絆。へ。石。堂。丸。が。言。世。請。と。書。志。し。し。る  
 紙。牌。と。つ。け。人。と。り。る。と。も。夏。旅。の。憂。う。し。と。と。忘。る。と。叮。嚙。よ。教。訓  
 志す。い。づ。つ。よ。ゆ。り。し。く。備。輦。ふ。あ。ご。も。笑。つ。と。或。ハ。高。野。山。と。俾。名。ら。  
 又。石。之。助。と。よ。呼。ぶ。く。石。堂。と。と。呼。ぶ。符。は。奴。方。る。人。の。い。と。苦。く  
 志。死。お。ら。し。て。某。が。穿。ら。る。脚。絆。へ。石。堂。丸。が。言。世。請。と。書。志。し。し。る  
 紙。牌。と。つ。け。人。と。り。る。と。も。夏。旅。の。憂。う。し。と。と。忘。る。と。叮。嚙。よ。教。訓  
 志す。い。づ。つ。よ。ゆ。り。し。く。備。輦。ふ。あ。ご。も。笑。つ。と。或。ハ。高。野。山。と。俾。名。ら。  
 又。石。之。助。と。よ。呼。ぶ。く。石。堂。と。と。呼。ぶ。符。は。奴。方。る。人。の。い。と。苦。く  
 志。死。お。ら。し。て。某。が。穿。ら。る。脚。絆。へ。石。堂。丸。が。言。世。請。と。書。志。し。し。る  
 紙。牌。と。つ。け。人。と。り。る。と。も。夏。旅。の。憂。う。し。と。と。忘。る。と。叮。嚙。よ。教。訓

痛痾の袢あま不坐ごする。水晶の珠数たまごを多おほくく町まちとくら笑わらひ出家しゅつがする  
 身みのりのくくくの虚実きょじつと論ろんぜんハ嗚呼あゝがすれ所ところ為なるれどその  
 迷まよひと解とざらんも。痛痛いたいたけとバ己おのれとを治なむ。大人おとな気けるも由よしるこ巴おほハ  
 一遍上人いつぺんじんのの遺物いぶつを。彼上人かのじんのの生涯しやうがいのゆかりのけりく。その世よのこハいふも  
 さらし。往古むかしの道德とくどくとらのとくをさうく志こころます。彼鏡かのきやう経きやうは仰あやりしる。  
 加藤左衛門尉重氏入道かとうざゑもんゑいぢゆうしにちだうと長銘打ながなげうちする物ものくろハアガ主ぬしと憑よき  
 なる。一遍上人いつぺんじんの悟道ごだうの事こと。祈親きん法師ぼうしが高野たかの詣まがと此こゝ彼撮合そくあひく  
 仰あやりし中なか茶ちやの小説せつせつ。その淵源えんげんを尋たづねば久明親王きうめいしん孫まご念ねんの將軍しやうぐん  
 として北條貞時きたじょうぢんじ執權しやくけんとにころ。伊い与よ烟えんの住人ぢゆうじん河野通廣かのとうかうが三男さんなん不  
 別府七郎兵衛尉通秀べつぷしちろべゑゑいとうしゆといふ武士ぶしのりり。通秀とうしゆあると其妻そのつまと妾めかけとを  
 双六盤しゆろくばん碁碁家け名な傳でん記きよと枕まくらと。改かへとさ合あして卧ふさるが。その髻むすぶ小蛇こへびとあり  
 て。嗟あはれあてんと出家しゅつがして諸國しよこくと修行しゆぎやうして智真坊ちまふくと号ごうと徳とくの究きゆうて  
 高たかかりく。道俗だうじやくよく敬信けいしんまで。一遍上人いつぺんじんのと稱せうしてのれ。かくて一遍上人いつぺんじんのと  
 伏見院正應三年ふしみのんていおうさんねん。秋八月廿三日あきふゆちふにち。摂州兵庫せつしゆひんぐの観音堂くわんおんどうあり。近きん化け  
 志こころのひりり。亨かう年ねん五十一と縁起えんぎよ見えり。その別府通秀べつぷとうしゆ入道にちだう  
 一遍いつぺんと加藤重氏かとうぢゆうし入道にちだうと仰あやりかえするあべ。又また川かわ萱うん道だう公こうの  
 子こ。石堂丸いしどうまるがひさり高野山たかのやまへ上のぼり登のぼりて。又またと索もとするより仰あやり出い世せ  
 へ。祈親きん法師ぼうしがのと取とり。元亨げんかう釋書しやくしよ卷まき之の十四じゆ。小釋せうしやくの祈親きんハ七歳しちさい  
 あり。父ちちと喪さうひ。十三歳じゆんさいあり。奥福寺おくふくじふ入いり。相宗さうしゆと号ごうする。母ははの病やまひ愈なむ。遂つひは  
 母ははの疾やまひと危あやしき。よらうて落おち髪かみと。まうと。母ははの病やまひ愈なむ。遂つひは  
 むほく。のりふけし。偏ひとへは法華經ほふけきやうと持念ぢねん。又また母ははの冥福めいふくと薦すすめ  
 ぐ。祈親きんと号ごうする。かくて祈親きんハ六十といふと。小忽せうこつ地ぢふあふ。又また母ははの

て。嗟あはれあてんと出家しゅつがして諸國しよこくと修行しゆぎやうして智真坊ちまふくと号ごうと徳とくの究きゆうて  
 高たかかりく。道俗だうじやくよく敬信けいしんまで。一遍上人いつぺんじんのと稱せうしてのれ。かくて一遍上人いつぺんじんのと  
 伏見院正應三年ふしみのんていおうさんねん。秋八月廿三日あきふゆちふにち。摂州兵庫せつしゆひんぐの観音堂くわんおんどうあり。近きん化け  
 志こころのひりり。亨かう年ねん五十一と縁起えんぎよ見えり。その別府通秀べつぷとうしゆ入道にちだう  
 一遍いつぺんと加藤重氏かとうぢゆうし入道にちだうと仰あやりかえするあべ。又また川かわ萱うん道だう公こうの  
 子こ。石堂丸いしどうまるがひさり高野山たかのやまへ上のぼり登のぼりて。又またと索もとするより仰あやり出い世せ  
 へ。祈親きん法師ぼうしがのと取とり。元亨げんかう釋書しやくしよ卷まき之の十四じゆ。小釋せうしやくの祈親きんハ七歳しちさい  
 あり。父ちちと喪さうひ。十三歳じゆんさいあり。奥福寺おくふくじふ入いり。相宗さうしゆと号ごうする。母ははの病やまひ愈なむ。遂つひは  
 母ははの疾やまひと危あやしき。よらうて落おち髪かみと。まうと。母ははの病やまひ愈なむ。遂つひは  
 むほく。のりふけし。偏ひとへは法華經ほふけきやうと持念ぢねん。又また母ははの冥福めいふくと薦すすめ  
 ぐ。祈親きんと号ごうする。かくて祈親きんハ六十といふと。小忽せうこつ地ぢふあふ。又また母ははの

二親不幸ゆゑ世と早く去るも子といふもののほか外ふじり  
 又母後世の苦樂とあはれは孝子の誠といふべからざらむと殊は志と励  
 まつ。あつて長谷寺は系流して通夜して七日はあぶらどき第三夜の  
 爰中より入つて告げしや。汝又母の生れをあらんとあはれ。高  
 野の金剛峯へ到るべしと教ふる。祈親爰にありて。あつて天のゆるを  
 俟て紀州へといふも。あつて高野山へ来りしや。弘法大師の  
 山と関さるもいふ。あつて八十餘年。堂宇既ら頽廢して荆棘路を塞  
 ぎて厭ふ。幸して塔所は到る。又祈ふ。とあはれは。あつて。あつて。  
 有一日觀史の内室はあつて。庭上は三莖の蓮花ありて。菩薩おのり。  
 二つの花の中は坐し。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。  
 一と。菩薩の名号を問ふ。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。

宣は是汝が年法華経読誦の感應とあつて。あつて。あつて。あつて。あつて。  
 花は汝が坐する如くと教ふる。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。  
 願成就しと頼母して。直は山はあつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。  
 修造を加ふ。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。  
 祈親が力とあつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。  
 されば。後生の苦樂とあらんと。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。  
 小峰より年経て高野山へあつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。  
 釋書の説と密小写とあつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。  
 つけあつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。  
 名を石堂と名つけ。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。  
 聖の孝天皇の後胤して。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。



石堂母



高野山  
石堂丸  
又と索るところ

の後胤ふく。藤原氏あり。利仁の孫吉信加賀守小任せられし。藤原の末小加賀の加の字と冠して子孫加藤と号す。その家亦異なる。又彼重氏入道と刈萱通と名つけし。筑紫の地名小象りて菅家の之を号する。菅新古今集小菅原贈大政大臣刈萱の園守ふの。ええつる人もあり。道なる。刈萱の園ハ筑前小あり。人もゆるさぬ。らべと稱せし。ひよ本つれて。刈萱道むが。その子石堂丸と号する。名告あはげし。死す。かれは物語の又母より。の祈祝法師と一遍上人の。の。あはげし。何をや。既よその淵源と論辨する。たれハ石堂丸の脚絆とす。の。世よある。べうもあはげ。彼刈萱の親子地。の。別。所以ある。の。や。好事乃。の。不為る。や。それ。の。考果さ。昔草紙物。と。を。の。

あまのふ哀し。と。や。却人情と。失ふ。あり。や。出家人。と。も。その子。の。孝。あ。つて。と。索。あ。つる。小。情。多。く。名。告。あ。つて。の。物。と。あり。の。と。真。の。出家。と。の。べ。彼。西。行。法師。と。年。を。経。て。妻。小。名。告。遭。ひ。その。女。児。と。共。も。住。り。又。読。書。見。基。子。の。論。ト。も。ひ。所。領。の。地。と。捨。妻。子。と。捨。て。出家。人。と。る。と。た。へ。仏。の。為。小。忠。臣。の。も。先。祖。の。為。の。不。孝。と。と。の。是。儒。の。道。也。遮。莫。仏。法。ハ。子。孫。絶。と。宗。や。と。生涯。を。食。さ。る。の。の。れ。ば。仏。の。道。へ。入。ん。の。妻。子。と。多。ひ。爵。禄。は。著。さ。ぶ。や。形。状。ハ。僧。多。り。と。も。を。ま。の。大。俗。か。の。ま。く。み。く。得。道。世。の。と。西。行。上。人。在。俗。の。日。出家。せ。ん。と。多。ひ。と。も。ふ。僅。よ。三。歳。の。り。ける。女。児。又。の。膝。に。携。つ。つ。抱。き。ん。と。て。泣。は。れ。ば。と。も。ふ。ふ。よ。く。覺。え。て。ま。が。し。ら。も。う。後。る。が。倍。と。多。ひ。と。も。凡。出家。の。志。を。遂。ん

盛衰記  
小高倉  
院在位  
のとき  
建礼門院  
小二人の  
半者あり  
横笛川  
菅と菅  
共々容  
色あり危  
まに川  
菅と人の  
名よめ  
とよめ  
とよめえ  
う

る。まづ愛惜の絆を断ぐ。真の道へ入りかじとて。嬰児を地土に投  
退け。雅ぞ家とせり。走利火宅中の人。こまをえり。人情ありと  
笑ふ。べけとど。仏の教の後。死を貴しと。又儒の教の後。死を不孝と  
と。彼を絆有るとか。くのじ。されば。年を經て。その子。小名告あり  
と。真の出家といふ。あは。彼奔る。時。我法師が。嵯峨野の奥へ  
隠す。疾。美女横笛が。尋ね。来つ。不達。びと。刈萱法師が。その子。よ  
名告あり。と。い。人物。諸の。日。を。お。び。く。と。論。ぐ。じ。南。无。阿。彌。陀。仏。と  
説。め。く。バ。聴。り。の。お。の。く。合。掌。し。て。南。无。阿。彌。陀。仏。と。應。る。

第七 平将門 衰龍の 襲束の上

浩處に上坐する。園をわたり。坂東声して。朕は。植武天皇第三世  
高見王の嫡子。高望王の孫。衣を。帝子。と。出。て。僅。よ。六。世。昭。穆。未

遠くら。開。威。と。新。皇。帝。将。門。の。衰。龍。の。脚。衣。る。小。匹。夫。下。郎。の  
散。本。ご。も。拙。女。夜。発。の。馬。骨。ホ。が。朕。と。閣。さ。く。の。の。じ。く。身。の。え  
諸。へ。不。敬。る。う。いと。嗚。呼。と。と。罵。と。バ。見。基。先。生。冷。笑。ひ。風。流。の。席  
少。の。貴。賤。と。ら。び。況。て。巾。邊。が。主。と。我。に。将。門。ハ。世。を。駭。く。る。逆。臣。な。れ  
ども。身。後。小。その。靈。を。宥。ら。と。ん。朝。廷。の。恩。澤。み。と。いと。あり。か。死  
幸。ひ。ら。ら。び。や。ま。づ。問。ぐ。ま。る。の。と。そ。の。あ。ま。不。佞。嘗。今。昔。物。語。神。皇  
正。統。紀。ホ。を。閱。し。て。粗。お。門。の。の。死。ある。と。い。ども。その。文。者。略。あ。り。て  
い。ま。ご。俗。説。を。辨。じ。る。ふ。足。ら。び。又。大。鏡。朱。雀。の。段。あり。と。い。ども。み  
だ。れ。出。る。と。云。ふ。と。の。を。記。さ。れ。う。と。い。ま。ご。世。の。傳。る。お。門。が。物。さ。う。の。  
妻。く。ら。む。じ。小。説。者。の。意。匠。より。出。く。実。事。の。少。か。ら。ぶ。その。二。三。を。と  
問。ん。将。門。當。時。關。左。八。州。を。掠。奪。し。て。漫。よ。偽。号。を。喝。さ。ら。る。平





徴して未嘗永く九條殿の奴婢とるべし。と罵るを手をとること打て春  
 と把りたるふ。左右のハツの凡手の甲小徴と血流と出れば紅と齧がじ  
 宿所よ飯て飲食を断て死を果して悪灵とるりてさるる怖れとあり  
 け且バ冥を宥さる次べとて神よ齊て宇治の離宮の明神とさるるは是  
 とつと或ハ忠支の悪灵宇治の橋姫の神小合とさるる崇せむ  
 てられバ圓融院の天延年間京師也。其後とるる人多く失うといふと  
 是疑ハるるの六つて此邊ハ當時將門が身小著らさるるのめればこの  
 為俸とさるりすもさるるらん。さるるの虚実を辨論して夜とさるり  
 清くあつたがごなれば故会ふゆいごや。さるるの卑を論じ巧拙と  
 褒貶して眼と瞪じ。相罵る衆衆とせん。さるるの出入のひねといハ件  
 の執束呵とさるら笑ひつ。忽地よ搖さ出見臺子のこの席も。博士と

稱せられるがら。かたさるりのとよ。さるるの第一條  
 將門既ハ八箇國とらに従へ。平親王と偽号とさるるあハ新皇  
 帝と稱し。これハ今昔物語も。新皇とまはして或ハ平親王とも稱  
 すと。記されハ後世のさるるの。さるるの將門の。鞍りの小  
 書記とさるると。後の人の小説の事と。實ると。さるるの  
 さるる近属將門記といふ古書世に出る人々の際略とさるる  
 べ。件の將門記ハ朱雀院と本皇とも。さるる本皇帝ともまはして  
 將門とバ新皇と記し。さるる當時の辞とさるる。さるる後の人の  
 皇と稱せん。と憚れば平親王とさるる。將門の親王とせん  
 と。さるる凡五世の王ハ人臣小列りて姓と賜るが古例也。又  
 一世の王二世三世の王といふとも。姓と賜りし由あり。さるる嵯峨以降

の源氏ゲンド小妻おすめなり。又また當今あきまの皇子みこなりとも。宜下よろこるけし。親王おんみと々  
 稱なづしなづももふふ既すでにに親王おんみととなり。ややふふ中な子こももふふ姓なづあるありところところののけけしし。彼  
 將門まさかどは平朝臣へいあそみの姓なづととりりけて平親王へいおんみと稱なづるとと鄙俗ひびやくの臆おそるる笑わらふ  
 小堀こほりなり。將門まさかどは東藩邊邑とうはんへんいの人ひとととりりても替かへへ京みやこ小こありて。執政しやくしやくの家いへ小  
 庵いへ從またたたたががむむららののままららざるざる小こありありびびののみみづづらら親王おんみとと偽  
 稱なづせせば平へいの姓なづは除のぞけけるる新皇あらたとと親王おんみとと音相近おとよけけるる。世俗せきやく詭まり  
 て。今いま小平親王こへいおんみといいふふ欲ほしし。又またままららざるざる凡おほ逆さか乱らんの臣おみととりりて皇みとと偽  
 上かみままららししの道鏡みちかがみとと法皇ほつみとと稱なづすす。將門まさかどももらら新皇あらたとと稱なづすすののみみ又  
 第二條だいにじょう小堀こほりなり。亦またの世よよりより七人將門ななにんまさかどへへ七人の陰武者ななにんかげむしやありありびびありあり。又  
 將門まさかどが身みしして七人の形状かたちふふせせるるももありあり。將門まさかどの惡あくをを佐たすけけるる  
 のの權守ごんしゆ與よ世王よせい。從た四よ佐さ下げ。藤原ふじ原はら玄茂げんぼう。治ち徑けい明めい坂さか上かみ。遂つひ高たか藤ふじ  
 原はら玄明げんめい亦またなり。加か以を將門まさかどの庶兄しやくけい平將頼へいまさかた舍す才さい平將武へいまさたけととて七人  
 ととりりてて。將門まさかど小こ方かたららとと故ゆゑ小國こくに民たみととりりてて。狼ろう戾れいは害あや怖おそれ  
 七人將門ななにんまさかどとと俾たすけけるる。又また小鏡こかがみ將門まさかどが真偽まことととままららんととりりて。貞盛まこと  
 秀ひで郷さと相あ謀まりりて人ひとととりりて美人びじんを贈おくじじ。この女子めいごが告つげるる小こよりより。貞盛  
 蜂谷はちやの動うごくくのの疾はや將門まさかどありととままららりりてて。貞盛まことととりりてて。對たいてて。天あまの  
 雙ふた言ごを報むかひひ。秀郷ひでさとその首級くびををひひくく。この小説せうせつをを實まことののととりりて  
 の下した総そうの佐倉さくらの海うみととりりて。小こおお門かど山やまとと習ならふふ。小山こやまありあり。その知しるる。往古むかし將門まさかどが  
 討うちちままららるる。蹟あとありあり。件くだんのお門かどへへ女むすめをを惹ひききひひて本形ほんがたととままららるる。終つひに貞盛まこと秀  
 郷ひでさと小こ養やしやうととりりて。最も期き小こ深ふかく彼かの女むすめを恨うらみみ。その女むすめが名なを拈ひげげ前まへと  
 るる。ひひるる。これこれはは今いま至いたるる。お門かど山やまの海うみととりりて。桔梗ききやう生なむむ。代しろ郊けうより根ねと  
 ううにに殖うむむ。地ち小こ枯かららととりりて。凡おほ草くさはは土つちの肥ひ瘦しゆう寒かん湿しつのの不ふ同どう小

よつて壤小あふとあへざる物あり。こゝ怪しむも足らば。これを若門の怨美小  
 附会して桔梗前といふ。又女と云へり出せしむ。と浅きもの。浮世の事  
 ども。又秀郷朝臣がお門の妻小通とて夫の真偽を探りしむ。といふ  
 説ハ今昔物語と板せし。注者の説あり。書と引れば。いふく信だ。は  
 同書小特門が兵士小平貞盛。源護扶ホが妻を拘て新皇門（お）  
 してまゐるは。ええ。こゝ小護扶と一人の名のやう。小書写せし。ハ傳写  
 の誤り。護ハ枝が又。と。特門が軍兵よ拘ら。こゝに貞盛朝臣と  
 扶朝臣の妻あり。又今昔物語より。あへ。と。お門が源世舟を載て。  
 貞盛の妻の返歌と漏り。そのとも亦異同あり。小説はお門の女  
 小惑弱して。遂小滅亡せし。い。世俗も又。その女の名ハ桔梗といひ  
 る。い。い。貞盛朝臣の妻。新皇門の正と。傳り傳らるる。と。特門記小

吉田郡蒜間の江の邊にて。縁貞盛源扶の妻と拘ら。陣沃。又治経  
 明坂上。遂高ホが中。彼女と追領せり。新皇ら。と。聽て。女人の醜と  
 匿。え。為。小。勅命と下。と。い。ども。勅命以前。夫。兵。ホ。が。為。小。悉く。虜。領  
 せら。ま。る。就中。貞盛の妻。と。あ。あ。あ。妻。と。後。あ。あ。妻。と。は。刑。を。れ。體。と。露。と  
 せん。こ。ほ。爰。小。件。の。陣。頭。ホ。新。皇。小。奏。と。ら。く。貞。盛。の。妻。と。容。顔  
 卑。から。バ。願。く。ハ。息。詔。と。垂。と。と。や。本。貫。小。遣。し。め。と。と。う。世。く。バ。  
 彩。皇。勅。して。女人。の。流。浪。ハ。本。属。へ。返。と。ら。る。法。式。の。例。に。又。懸。寡。孤。独。と  
 懽。恤。と。加。る。古。帝。の。恒。範。あり。と。て。一。襲。と。賜。て。り。又。彼女。の。奉。公。と。試  
 為。よ。忽。地。に。勅。あり。て。歌。し。ま。は。く。

卅尔手毛風之便丹。吾問枝離垂花之宿緒  
 貞盛の妻。幸小恩餘の頼小遇ぬま。和之曰。

多治経明

将門歌を  
負盛の妻と  
いふむ  
云々の妻は  
毒盛の妻は  
何の本文よえ  
えん

偽新皇将門

藤原遂高

平負盛妻

源扶毒



卅尔手毛花白。散来者。我身和比志止於毛保江奴免。

その次小源扶の妻一身の不幸と恥て人ふ寄て歌てりらる。

花散之我身年不成吹風波心年遭杵物尔佐利計由。

この言を既ぶの間人々和怡て逆心脚止ぬとええり。その為体とひ

あひとと。魏曹操が冀州を撃とりと死。曹丕真先よ城中小進と

入。遠熙が妻ある甄氏と掠て逐よ后とあつるふ似らる。こまらら

古言小由と死。貞盛秀御共小謀りて将門ふ美女を抱。軍略を

懈せといふ小説の源胤とあつるふ足るん。いふべらるる中あつるふ且

息を吹くとといひつゝあつる懐紙りて額の汗を拭ひけり。



